

吹奏楽のガイドライン 愛知県吹奏楽連盟

5月25日、愛知県吹奏楽連盟から「吹奏楽部の活動再開に向けたガイドライン」が公表されました。

特に合奏練習は限られた空間で多くの人が息を使って音を出し三密に当たるので、①一部屋に集めての合奏練習やミーティングを避け、②距離をとってパート練習を行う、③個人練習を活動の中心とする等を推奨し、指導者の柔軟な発想により「新型コロナ時期にふさわしい吹奏楽活動」を実践して欲しいとしています。

＊再開に向けた準備期間：部活動再開の一週間前に、児童・生徒との面談などで休業中の生活状況を把握し、部活動再開計画を作成する。

＊練習時の感染防止策：部屋の消毒、手洗いの徹底、マウスピース・頭部管や打楽器のスティックの消毒、楽器は共有しない、三密を避ける。

＊部活動再開の際の留意点：本人・保護者の意向を尊重し参加を強要しない、顧問や指導者は必ず立ち会う、立ち会えない場合は実施しない、人と人の間隔は屋外で2m以上確保し、屋内では十分な換気をとった上で2m以上開けられればマスクは不要とする、ハイタッチや握手、近距離での会話は避ける。

以上は6月15日までの校内活動についてのガイドラインです。また、対外的な活動は自粛するようになっていきます。実際の運用にあたっては、各市町教育委員会や学校長の判断により、実情に合わせて具体的方針を決めることとしています。また、職場・一般バンドについてもこのガイドラインに準じて慎重に活動するよう求めています。

戦時期日本の音楽

戸ノ下達也さん(洋楽文化史研究会会長・日本大学文理学部人文科学研究所研究員)が、読売新聞東京本社版の夕刊で毎週火曜連載の「〇〇の流儀」シリーズに「戦時期日本の音楽」と題して、5月19日から連載を始めました。計4回掲載の予定です。

戸ノ下さんは、執筆の思いを次のように述べています。「先行きの見通せない日々ですが、そんな中でも、改めて、芸術文化のあり様と将来を考えさせられる毎日です。そして、2020年は、敗戦75年という節目の年でもあります。歴史を見据える重さを実感する昨今ですが、そのような思いを、読売

新聞のコラムで書かせていただきました。」

1回目(5/19)「日常の娯楽 国策宣伝も」では、1986年、卒論のテーマを考えていたとき、朝日新聞で山田耕筰生誕百年を取り上げたコラムに「作曲家の業績を正確に歴史の中に位置づけるためには、第二次世界大戦中のことも含めてすべてを明らかにしなければならない」の一文が目にとまり、戦時期の音楽に何があったのか、この疑問に取りつかれて以来、このテーマに取り組み始めたことを紹介しています。

戦時中の音楽は必ずしも政府や軍の統制を受けた暗黒一色ではなく、流行歌やクラシックの演奏、レコードやラジオなどで様々な音楽が楽しまれていた一方、音楽も国策の一端を担われ、政治、軍事、社会と密接になっていったといえます。

2回目(5/25)「レコード検閲 歌い方まで」では、満州事変期には戦線を歌った「国境の町」など社会状況が色濃く反映され、ダンスホールの取り締まりやレコード検閲が強化されてゆくことなどを紹介しています。

戸ノ下さんは、昨年9月から本年1月にかけて「日本の合唱史・再考」という3回シリーズのセミナーを開催し、①1860年代から敗戦に至る社会と「合唱」、②戦後の社会と「合唱」、③合唱の姿とは、というテーマで日本のあらゆる場面で「合唱」がどう扱われてきたか、どのような位置付けにあったかを歴史認識に立って掘り下げてきました。

現在のコロナ禍における音楽は、戦時中とはまったく背景が異なりますが、心から楽しむことができない状態にあるのは同じようなことです。「戦時期日本の音楽」は直接現在の合唱の問題には触れていませんが、あらためて音楽・合唱の歴史を知ることができます。

埼玉県久喜市 6月より通常貸し出し

埼玉県東部の久喜市は公共施設を6月より通常貸し出しとなりました。とくに合唱お断りの制限もなく、健康に留意して使えばよいとのこと。



男声合唱団コール・グランツがいつも使っているホールは、定員155人、天井も高いので、三密にならずに歌えそうです。